

ACC 主催セミナー 佐藤宏道「見ることの諸相」

吉原和音

2009 年度 ASP 学科卒業生



私たちが日々とくに意識もせずに行っている「見る」という行為。いま「目に映っている像」がそのまま「見えているもの・こと」であると、私たちは普段そう認識している（そうじゃないと生活できない！）。だが、「見る」ことは、ほんとうは脳や肉体の経験に基づく複雑なシステムによって支配されている、何とも不思議な行為なのだ！ ということを講義と実技を通して痛快に体感していくのが、今回2度目の開催となる佐藤宏道先生のセミナー「見ることの諸相」だ。

セミナーは前回とほぼ同じ流れで展開された。前半部分では私たちの眼がどのように光を捉え、色や像を認識しているのかを理論に沿って解説。そこではいかに私たちが「見たいものを、見たいようにみているのか」を実感できた。後半部分は、上下左右が反転して見える不思議メガネを装着して、歩いたり絵をなぞったりするなどの実技体験を行った（詳しくは2010年の回を参照）。

前回同様のセミナーが終盤にさしかかった頃、佐藤先生は「新ネタ」をふたつ提示された。ひとつは情報の欠落を脳が都合よく補う例として、飛行機が雲を通り抜けるアニメーション。これは昨年音飛びした「エリーゼのために」の、視覚バージョンだった。そしてもうひとつは、昨

年のセミナーのキーワードだった「アイデンティティ」に続くキーワードとして提示された「リアリティ」という言葉である。

佐藤先生によると、リアリティとは、「自分にとってそれが何であるか」ということを受容することである。私たちの脳が生み出すリアリティとは、アクティブな処理によって自分の都合の良いように（経験や思い込みによって）ものを見ることだという。対象（例えば作品）そのものの中にリアリティが存在しているわけではなく、私たちの側、私たちの脳が生み出す“自分が見たいもの”にすぎないというのだ。つまり、自分の経験（に基づく脳のシステム）をもって認知した世界を「翻訳」していくことで、見えたものに“リアリティ”が付与されていくのである。しかし、自分のリアリティだけを信じていると、現実との乖離が起きてしまう。そこで、自分のリアリティ読解のシステムの状態を確認・修正するためにこそ、他者との情報交換、つまりコミュニケーションが必要となるのだ。自身と他人のシステムを同じ世界で運用するための調整方法として、コミュニケーションがいかに重要なツールであるかを改めて実感した。

見たことや聞いたことを翻訳して他者に伝えることは、アートそのものである。このような「見る」ことを理論的、体感的に見直す場は、学生にとって、そしてもちろん参加した全ての人にとって重要な経験となったことだろう。兎にも角にも、社会に出て学生の時のように「なぜ？」に時間をかけられなくなってしまった私にとって、ハッと眼が覚めるような濃密な3時間であった。

最後になりましたが、このような機会を提供してくださった佐藤宏道先生、ACCの皆様には感謝とお礼を申し上げます。

京都造形芸術大学

アート・コミュニケーション研究センター主催セミナー

「見ることの諸相」

講師：佐藤宏道氏（大阪大学大学院医学研究科教授）

日時：2011年7月10日（日）13:30～16:30

場所：京都造形芸術大学人間館 3F・NA302 教室

参加者：約50名